東京外国語大学
留学生日本語教育センター論集　31：61～75，2005

指示詞「そんな」に見られる感情・評価的意味
―その意味の実態を探る―

鈴木　智美

(2004. 10. 29 受)

【キーワード】　指示詞、こんな／そんな／あんな、感情・評価的意味、そんなN、名詞修飾

1　はじめに

指示詞「こんな／そんな／あんな」には、何らかの感情・評価的な意味が強く観察される場合があることが知られている。例えば以下の例(1)～(3)のような場合である。

(1) いい年をして、こんなことがまだわからないのですか。
(2) A：「乗り換えを間違えないようにね。」
　　B：「そんなことは、わかっているから大丈夫だよ。」
(3) 山田さんは、あんなものを集めているのですか。

例(1)の「こんなこと」というのは、おそらくその年齢の者なら誰もがわきまえておくべきような常識的なことを意味するのであろう。例(2)の「そんなこと」というのは、わざわざ注意されなくてもわかっているような簡単なこと、という意味に解釈される。例(3)の「あんなもの」というのは、おそらく普通は趣味として集めないようなものを指して、びっくりしているものと思われる。

これらの例の「こんな／そんな／あんな」をそれぞれ以下の例(4)～(6)のように「こういう／そういう／ああいう」に置き換えてみると、叱責・非難したり、思わず不満をもらしたり、あるいは意外なことに驚いたりするこのような文脈には、いささかそぐわない表現になるように思われる。

(4) いい年をして、こういうことがまだわからないのですか。

(5) A：「乗り換えを間違えないようにね。」
　　B：「そういうことは、わかっているから大丈夫だよ。」
(6) 山田さんは、ああいうものを集めているのですか。

上の例(4)～(6)からは、例(1)～(3)から読み取れるような強い感情・評価的意味は、さほど強く感じ取れない。

指示詞に関する先行研究は数多くある。しかし、それらは主としていわゆる「コ／ソ／ア」の使い分けに焦点を当てたものとなっている[1]。そのため、指示詞「こんな／そんな／あんな」に見られるこのような感情・評価的意味については、まずそれがどのようなものなのか、その実態を見た上で、そのような意味が生じるしくみを明らかにすることが必要であると思われる。

本稿では、現代日本語の実例を数多く観察した上で、例(1)～(3)に見られるような指示詞「こんな／そんな／あんな」に伴う「感情・評価的意味」が、実際にどのようなものかを探ることを目的とする。

2　考察の対象とする範囲

本稿では、考察の対象とする指示詞をまず以下のように限定する。

(7)「こんな／そんな／あんな」の中から、いわゆる「ソ」系の「そんな」を対象とする。
(8)「そんなN（名詞）」という名詞修飾の形をとるものを対象とする。「そんなだ／です」という述語の形、および「そんなに」という副詞相当表現は対象から除く。

(7)については、いわゆる「コ」系の指示詞「こんな」には、「ソ」系の「そんな」および「ア」系の「あんな」には見られない後方照応の用法がある[2]こと、また「ア」

---

[1] ただし、岡部（1994, 1995）は「コ／ソ／ア」の使い分けではなく、「こんな／そんな／あんな」類と「こういう／そういう／ああいう」類との使い分けについて考察したものである。また、木村（1983）は「こんな」と「この」の文脈照応の違いについて分析している。
[2] 正保（1981）、木村（1983）等。例えば「ある日こんなことがあった。朝早く公園を散歩していると……」と言った場合、「こんなこと」の内容は以下に続く「朝早く公園を散歩してい

系の「あんな」には、話し手・聞き手の共通経験に言及するという、「こんな」および「そんな」には見られない制約があることによる。

また、(8)は、「そんな」が「そんなN」の形で名詞を修飾するのと異なり、「そんなに」は、これでひとまとまりとして述語や連用修飾語を修飾するという統語構造上の違いがあるためである。また「そんな」が、「そんなだ／です」という述語の形で現れることは少ない[(3)]ということによる。

本稿では、考察の第一歩として、このように対象とする指示詞の条件を統一することとする。ただし、次段階では、ここで対象から除いた「そんなN」以外のものも対象に含めることが必要になると思われる。

3　先行研究における記述

いくつかの先行研究では、指示詞「こんな／そんな／あんな」に見られる感情・評価的意味に関して以下の(9)～(16)のような記述が見られる。

(9) 徳川・宮島編（2001:170）（「こんな」および「こういう・かかる」についての記述（下線は引用者））

文体をのぞいては、ほとんど違いがない。ただし、「こんな」と「こういう」とをくらべると、「こういう」が客観的に類似のものとの比較をのべているのに対し、「こんな」はやや価値的な判断が加わっているという傾向がありそうである。たとえば「こんな本だれが読むものか」というばあいには単に「こんな種類の」ということではなく、「これほどまでにつまらない、くだらない本を」ということであり、「こんなごちそうは食べたことがありません」というのは「これほどまでにすばらしいごちそうは」の意味である。

【文体】「こんな」「こういう」は日常語。「こんな」の方がやや話しことば的

ると……」という後続の文脈で語られることになる。このような場合「そんな／あんな」は用いられない。

(3) この形は「まれにしか使われない」（金水他（1989:53））と指摘されている。例えば「私の部屋もこんなだったら（＝こんな様子だったら）いいのですが」（金水他（1989:53）下線は引用者）という例が挙げられている。実際に『新潮文庫の100冊』CD-ROM版（翻訳作品を除く）を見ると、「そんな」の用例は5000例ほど見られるが、その中で「そんなだ／です」の用例は10例以下しか見られない。

かもしれない。「かかる」は文語的。

ここでは、「これほどまでにつまらない、くだらない」という否定的な感情・評価的意味と、「これほどまでにすばらしい」という肯定的な感情・評価的意味とが指摘されている。

(10) 白川（監修）(2001:11)（「こんな」類と「こういう」類との比較（下線は引用者））

指すものを否定的に捉える場合は通常「こんな」類が使われます。「こんな」類はこうした含意を持ちやすいので注意が必要です。
母：今日はこの服を着ていきなさい。
娘：{○こんな服／？こういう服} いやよ。子どもみたいじゃない。

ここでは「こんな／そんな／あんな」を用いた場合、対象に対し「否定的」なとらえ方がなされていると分析されている。

(11) 岡部（1995:639-640）（下線は引用者）

コンナ類とコウイウ類の用法の違いの一つめとしては、コンナ類には名詞句から抽出される属性の程度を表し修飾する用法があるということがあげられる。［中略］困惑や照れなどを表す用法がコンナ類にはあるが、これも、コンナ類がショック等の感情の程度を表すことができるためだと考えられる。［中略］コンナ類が「感情的な評価」や「価値判断」を伴うというニュアンスは、ここから生じるものと思われる。

ここでは、例えば「こんなひどい気持ち」と言った時の「こんな」は「ひどい気持ち」の「ひどさ」を、また「どんな大数学者の言った定理であろうと」という時の「どんな」は「大数学者」の「偉大さ」というように、「こんな／そんな／あんな」が、修飾する名詞句の属性の程度を表すと見ている。

どのような感情・評価を表すかは詳しく記述されていないが、「偉大さ」や「ひどさ」など修飾する名詞句の属性の程度を表すのであれば、肯定的・否定的、どちら

の感情・評価もあり得るものと考えられていると思われる。

(12) 小学館辞典編集部編 (1994:1003-1004) (「こんな／こういう／このよう／かかる／かよう」についての記述 (下線は引用者))

「こんな」が、対象を身近に感じている表現であるのに対して、「こういう」「このよう」は、「こんな」よりも客観的である。したがって、「こんな人とは思わなかった」と「こういう人とは思わなかった」をくらべると、前者は、「人」に対する話者の感想 (いい人だ、腹黒い人だ、など) を意味し、後者は、「人」の状態の説明 (自分に親切にしてくれた、自分にいじわるをした、など) を意味する。対象への身近さはマイナスの評価を伴いやすいので、「こんな人」といった場合、ほめる意味ではなく、けなす意味になることが多い。

ここでは、「こんな」は対象を身近に感じるがゆえに、プラスよりもマイナスの感情・評価的意味を伴いやすいと分析されている。

(13) 森田 (1989:427-428) (「こんな」「こう」「こういう」についての記述 (下線は引用者))

「こういう／そういう／ああいう／どういう」は、“このような”の意で「こんな／そんな……」と同じ意味を表している。ただし、「こんな」系統が「何だ、こんなやさしい問題か」「そんなこと、だれにだってできる」のように、対象を見下し軽視する態度が強いのに対し、「こういう」系統は丁重で、対象を尊重する気持ちが強い。気の張る相手への改まり表現では「こんな」系統よりは「こういう」「このような」系統を用いるほうがよい。

「こんな」類と「こういう」類を比較し、「こんな」系統には「対象を見下し軽視する」態度が、「こういう」系統には「丁重で、対象を尊重する」態度が強いとしている。「こんな／そんな／あんな」に見られる感情・評価的な意味は、ここでは否定的な意味合いを表すものと分析されていることになる。

(14) 金水他 (1989:53-54) (波線以外の下線は引用者)

「{こんな／そんな／あんな} X」を用いる場合は、対象の性質・特徴に対する強い感情的な評価を伴うことが多い。

例 (7)「外貨の両替にはパスポートが必要です」

「{そんなこと／それ} は分かっている」

「それ」を用いた場合は、単に相手の言った「外貨の両替にパスポートが必要であること」は分かっている、ということを指摘しただけの表現である。「そんなこと」を用いると、相手のいったことを含めて、常識的なことは分かっているのだからいちいちうるさく言うな、という不快感が表される。

例 (8) みんなの前で {あんなこと／あのこと} を言われたらだれだって怒ります。

(「あんなこと」＝「そのとき言われたようなひどいこと」)

(15) 金水他 (1989:54) (下線は引用者)

「{こんな／そんな／あんな} X」と否定の述語の形を組み合わせる場合は、強い否定の気持ちを伴う。

例 (9) (書店で)

客「『格助詞のすべて』という本はありませんか」

店員「{そんな本／その本} はありません」

「その本」を用いた場合は、店員は「格助詞のすべて」という本のことを知っているが、たまたま店にない、という意味になる。「そんな本」を用いると、「格助詞のすべて」という本を店員がまったく知らないか、または「『格助詞のすべて』のような変な本はこの店にはない」という意味になる。[中略]

例 (11)「『コソアド殺人事件』はお読みになりましたか」

「私、{そんな／そういう} 本は読まないんです」

<注 3> (11)のように否定の述語 (「読まない」) と組み合わされる場合、「そんな」を用いると、「そんな {おかしな／下品な／低俗な／…} 本は読まない」のように、強い非難の調子を感じさせる。「そういう」や「そういった」を用いれば、比較的客観的な表現になる。

(16) 金水他 (1989:61-62) (波線以外の下線は引用者)

「{こんな／そんな／あんな} ことを」が「発言・思考を表す動詞」に係ると、発言・思考の内容を表す。[中略]
「こんな／そんな／あんな」が「話／うわさ／評判／ニュース／計画／決定／案…」など、言語的な情報を表す名詞を修飾すると、その情報の内容を表す。[中略]
<注1> [中略]「こんな／そんな／あんな」を使った場合、単に発言・思考の内容を表すだけでなく、「そんなおかしな話」など感情的な評価が込められる場合があるので、注意すること。

(14)(15)(16)のように、ここでは「こんな／そんな／あんな」を用いると「不快感」や「強い否定の気持ち」「強い非難の調子」など、否定的な感情・評価的意味が表されると指摘されている。

4 「そんなN」に見られる感情・評価的意味の実態

第3節で見たように、先行研究では「こんな／そんな／あんな」に否定的な感情・評価的意味が見られるとするものと、否定的・肯定的どちらの感情・評価的意味も見られると考えるものがある。どちらかと言えば、否定的な意味合いのみを指摘するものが多い。

では、実際に「そんなN」にはどのような感情・評価的意味が見られるのだろうか。『新潮文庫の100冊』(CD-ROM版)および「青空文庫」(http://www.aozora.gr.jp)、またインターネット上の文書などで実例を探りながら検討してみると、いくつかの特徴的な例が見られることがわかる。(ただし、本稿で以下に挙げる例文はいずれも実例を参考とした作例である。)

4.1 否定的な意味合いが特徴的に表れる表現(1)—「そんなもの」「そんなこと」

まず、「そんなN」におけるNが「もの」や「こと」という名詞である場合には、否定的な意味合いを伴うことが非常に多く特徴的である。

「そんなもの」という表現は、以下の例(17)～(19)に示すように否定的な文脈において用いられることが多い。

(17) そんなものは｛だめだ／つまらない／どうでもいい／役に立たない／馬鹿げている／無用だ／無意味だ／虚像だ／捨ててしまえ｝。
(18) そんなものを｛選ぶのは愚かだ／欲しがる人間がいるだろうか？／持っていてどうするつもりだ／食べていると体によくない｝。
(19) ｛人生／世の中／人間／運不運｝とはそんなものだ。

これを、それぞれ以下の例(17′)～(19′)のように肯定的な意味合いの文脈に変えようとすると、不自然な表現となってしまう。

(17′) ？そんなものは｛すばらしい／意義がある／重要だ／大事にしろ｝。
(18′) ？そんなものを｛選ぶのは賢い／食べるのは体にいい｝。
(19′) ？｛人生／世の中／人間／運不運｝とはそんなものだ。すばらしい。

「そんなもの」は、このように価値・意味・内容・益のないもの、また自分の力ではどうすることもできないものなどを表す際に用いられることがわかる。
このことは、「そんなもの」が以下の例(20)～(25)で＿＿＿を付したような「せいぜい」「なんか」「なんて」「どうせ」「単なる」「ぐらい」「大した～ない」などという表現と共起することからもうかがわれる。

(20) 出かけるといっても、散歩とか、映画とか、せいぜいそんなものだ。
(21) そんなものなんか、さっさと捨ててしまえ。
(22) 人生なんて、どうせそんなものだ。
(23) そんなものは、単なる自己満足だ。
(24) そんなものをいいと思うのは、私ぐらいだ。
(25) そんなものは、大したものではない。

また、以下の例(26)aのように、「そんなもの」は予想していなかった意外なものを示す場合にも使われる。これを(26)b のように予想通りであるという文脈に変えると、不自然な表現となってしまう。

(26) a　そんなものを読んでいるというのは、意外だった。
　　b？そんなものを読んでいるというのは、予想した通りだった。

したがって、「そんなもの」によって示される“否定的”な感情・評価には、単なる“価値の低さ”だけでなく、自分の力が及ばないということや予想外だということなども含まれると言えるだろう。

また、同じく「そんなこと」という表現も、以下の例(27)～(31)のように否定的な意味合いで用いられることが多い。

(27) そんなことは｛どうでもいい／わかりきったことだ｝。
(28) そんなことより、もっと大事なことが他にあるはずだ。
(29) そんなことは｛嘘にきまっている／しらじらしい｝。
(30) そんなことをすれば｛きっとしかられる／大変なことになる｝。
(31) そんなことは考えても｛しかたがない／どうにもならない｝。

これを、以下の例(27′)～(31′)のように肯定的な文脈に変えようとすると、不自然なものとなってしまう。

(27′) ？そんなことは｛重要だ／奥深いことだ｝。
(28′) ？そんなことは、一番大事なことだ。
(29′) ？そんなことは｛絶対に本当だ／いかにも本当らしい｝。
(30′) ？そんなことをすれば｛きっとほめられる／いい結果になるだろう｝。
(31′) ？そんなことは｛考えた方がいい／考えるべきだ｝。

このように「そんなこと」は、価値・意味・真実味のないこと、悪い結果を招くようなこと、自分の力でどうすることもできないことなどを表す場合に用いられることがわかる。

「そんなこと」が価値の低いつまらないこと、わかりきったこと、意味のない余計なこと、理解しがたいことなどを示すことは、これが以下の例(32)～(37)の＿＿＿のような、「だって」「ぐらい」「とっくの昔」「ありがた迷惑」「うつつを抜かす」「自分でもわからない」などの表現と共起することからもうかがわれる。

(32) そんなことは、小学生にだってわかる。
(33) そんなことぐらい、言われなくてもわかっている。
(34) そんなことは、とっくの昔に承知している。

(35) そんなことをしてもらっても、ありがた迷惑だ。
(36) そんなことにうつつを抜かす前に、するべきことは山ほどある。
(37) どうしてそんなことを思いついたのか、自分でもよくわからない。

また、以下の例(38)に示すように「そんなこと」もやはり“予想していなかった”ことを示す場合に使われる。

(38) a　そんなことになったのは、意外だった。
　　b ？そんなことになったのは、予想した通りだった。

また、次の例(39)は、「そんなこと」によって指示される事態が実際にはプラスの価値を持つものと考えられる場合である。しかし、受け止める側はそれを単純に“肯定的”に判断・評価しているのではない。

(39) a ？そんなことをしてもらって、うれしいです。
　　b　そんなことをしてもらって、身に余る光栄です。

「そんなこと」をしてもらったということに対し、(39)a のように単純に「うれしい」とすると不自然な表現となってしまう。しかし、(39)b のように「身に余る光栄だ」とすれば不自然ではない。

これは、「そんなこと」がたとえ客観的にプラスの価値を持つものであったとしても、話者がそれを単純に“肯定的”に受け止めてはいないことを示していると思われる。話者にとってそれは、例えば「気恥ずかしい」「不釣り合いな」「身分不相応な」こととしてとらえられていることがうかがわれる。

(40) a ？そんなことをしてもらって、うれしいです。
　　b　そんなことまでしてもらって、うれしいです。

同じく(40)a（＝(39)a）は、(40)b のように「そんなことまで」とすれば、不自然さが解消される。「そんなこと」がたとえ客観的には“うれしく”なるような肯定的な価値を持つものであったとしても、話者にとってそれは普通に考えられる範囲、予想できる範囲を超えた「意外な」「予想外な」ものとしてとらえられていることが

わかる。

4.2　否定的な意味合いが特徴的に表れる表現(2)—「そんな私」「そんな＋形容詞（相当表現）＋N」

また、「そんな私」「そんな＋形容詞（相当表現）＋N」という表現も、否定的な意味合いで使われることが多く、特徴的である。

「そんな私」の現れる文脈を見てみると、以下の例(41)～(45)のようにそこに示された「自分」はいささか愚かしいもの、無知なもの、平凡なつまらないもの、取り柄のないもの、みっともないもの、問題を抱えているものなどとして、自嘲気味に語られていることが多い。

(41) 私はゲームに目がない。しかし仕事の合間に時間をとって遊ぶことなど難しい。そんな私が久し振りにはまってしまったのがこのゲームだ。
(42) ほんの数年前まで、田舎の生活など自分とは無縁のことだと思っていた。そんな私が結婚したのは、なんと農家の跡取り息子だった。
(43) 体力はない。根性も愛想もない。そんな私にできる仕事などあるのだろうか。
(44) 目が痛い。涙も鼻水も出てきた。町中でグズグズやっていると、そんな私に、黙ってハンカチを差し出してくれた人があった。
(45) 仕事は山積み。疲れもたまっている。肩こり・腰痛・眼底疲労にも悩まされる。そんな私にこの強力サプリは朗報だ。

また、「そんな＋形容詞（相当表現）＋N」を見てみると、否定的な意味合いの形容詞を伴うことが多い。形容詞自体が否定的な意味を持たない場合も、否定の述語を伴うことによって、全体として肯定的な内容が打ち消される。

(46)「そんな＋形容詞（相当表現）＋N」（否定的な意味合いの形容詞（相当表現）を伴うもの）

そんなくだらない話　　そんなつまらない間違い
そんなばかげた考え　　そんなはかない夢
そんなしらじらしい嘘　　そんなひどい言い方
そんな惨めなありさま　　そんな愚かな真似

そんな危険な仕事　　そんな恐ろしい病気
そんな空しい努力　　そんな見え透いた嘘
そんなさもしい根性　　そんな残酷な仕打ち
そんな失礼なこと　　そんな勝手なこと
そんなあつかましい話　　そんなあぶなっかしいやり方
そんなあさましい考え　　そんなはしたない了見
そんな古い手　　そんな理屈っぽい物言い
そんな堅苦しい挨拶　　そんな水くさいこと
そんな乱暴な言葉　　そんな可愛げのない表情
そんな弱い気持ち　　そんな男らしくない行動
そんなこわい顔　　そんな生意気な態度
そんな恥ずかしいこと　　そんな投げやりな言い方
そんな面倒な事件　　そんなかわいそうな話
そんな物騒な品物　　そんな突拍子もない思いつき
そんな優柔不断な返事　　そんなむちゃくちゃなやり方
そんな冷たい人間　　そんな鬱陶しいこと
そんな無遠慮な言い方　　そんな姑息な手段

以下の例(47)～(51)では、「そんな＋形容詞（相当表現）＋N」の形容詞自体は否定的な意味合いを持つものではない。しかし、否定の表現を伴うことによって、全体として肯定的な内容が打ち消されている。

(47) そんないい話があるわけがない。
(48) そんな偉い人がわざわざ来るはずがない。
(49) そんな重大な意味で言ったのではない。
(50) そんな簡単なことで済む話ではない。
(51) そんな若々しい気力は私にはない。

また、以下の例(52)～(57)も形容詞自体は特に否定的な意味合いを持つものではない。しかし、文全体としては“肯定的”な内容が語られているわけではない。

(52) そんな大切なことをどうして今まで黙っていたのだ。

(53) そんな可愛い子供を平気で置き去りにするなんて。
(54) 私がそんな大事な話をしても、いつも冗談で流されてしまう。
(55) そんな立派な賞を私などがいただいてもいいのでしょうか。
(56) そんな哲学的な話はもうやめましょう。
(57) 私までなぜかそんな殊勝な気持ちになってしまった。

例(52)(53)(54)は価値あることが十分に認識されないことへの非難・ぼやき、例(55)は立派な賞と自分とが不似合いなこと、例(56)は高尚な話の現実味の乏しさ、例(57)は自分でも予想していなかった事態となったことが述べられている。

また、「そんなN」における名詞自体が肯定的な意味合いを持つものである場合もある。しかし、その場合も文全体としては肯定的な内容が打ち消されるか、あるいは話者が事態を価値のないもの、不釣り合いなもの、予想外・意外なことなどとしてとらえている文脈となっている。

(58) あいにく私にそんな度胸はない。
(59) そんな励ましの言葉も、今の私にはただ虚しく響くだけだ。
(60) そんな美人を奥さんにもらえるなんて、彼には少しもったいない。
(61) 真冬の寒空の下、見知らぬ人のそんな親切が身に沁みた。

4.3 その他の制限

また、「そんな～」の形が、感情・評価的な意味を伴う慣用句的な言い回しとなっている以下のような例も見られる。この場合「そういう」では言い換えができない。

(62) そんな｛ばかな／むちゃな／殺生な｝！
＊そういう｛ばかな／むちゃな／殺生な｝！

(63) 約束を忘れてしまったのですか。そんな！[4]
＊約束を忘れてしまったのですか。そういう！

---

[4] 例(63)のような「そんな」については、岡部（1995:640）で「困惑や照れなどを表す用法」として「コウイウ」類に置き換えられないものの一つとして指摘されている。「この病気はもうなおらないだろう。」「｛そんな／＊そういう｝。」という例が挙げられている。

また、否定の「～ない」を伴う場合に、明らかに「そういう」で言い換えのできない以下のような例も見られる。

(64)　連絡がないなんて、そんなはずはない[5]。
　　＊連絡がないなんて、そういうはずはない。

5　まとめ

本稿では、指示詞「そんな」を含む「そんなN」という表現に実際にどのような感情・評価的意味が見られるのか、その実態を見た。ここで明らかになったことは以下の２点である。

まず、「そんなN」によって表される感情・評価的意味は、何らかの意味で「否定的」な意味合いを持つものとなっている。先行研究では、「こんな／そんな／あんな」には否定的・肯定的ともに感情・評価的な意味合いが伴うとの指摘がある。しかし、実際に多くの例にあたって確認してみると、「そんなN」に観察される感情・評価的意味には否定的なものが圧倒的に多いことがわかった。特に「そんなもの」「そんなこと」「そんな私」「そんな＋形容詞（相当表現）＋N」という表現は否定的な意味合いをもって用いられ、特徴的であると思われる[6]。

また、“否定的”といっても、それは必ずしも客観的に価値が低い事態のみを指すのではない。たとえ客観的にプラスの価値を持つ事態であったとしても、話者がそれを予期しないこと、驚くべきこと、身に余るような不釣り合いなこと、気恥ずかしいこと、意味のないことなどとしてとらえている場合もある。「そんなN」は、このように話者がとらえた「価値のなさ」、「意外性」や「現実味の乏しさ」「居心地の悪さ」といった否定的な感情・評価的意味を表す。

また、本稿で残された課題は以下の２点である。このような感情・評価的意味は

---

(5) 寺村（1984:265）に「ソンナハズ」は「強い否定では使われる」との指摘がある。「親方ガ引退ヲススメタソウダヨ」「エ？　ソンナハズハナイ」とは言うが、「課長ハ今日コチラニ見エマスカ」に対して「＊ハイ、ソンナハズデス」は非文となる。この場合の答えは「ハイ、ソノハズデス」である。（下線は引用者）

(6) 「そんなN」の形をとるものの中で、「そんなふう（風）」についてはまだ分析が十分にできていない。ただし、この場合も「そんな風に束縛されるのは不愉快だ」「そんな風に考えてもらっては困る」「そんな風に勝手に想像されると迷惑だ」など、否定的な感情・評価的意味は確かに観察される。

指示詞「こんな／そんな／あんな」のいずれにも共通に見られるだろうか。そして、このような感情・評価的意味はいかに発生するのだろうか。第３節で見た先行研究では、文体の違いなどをその理由として挙げるものもあった。しかし、これらの指示詞のより本質的な意味とのつながりにおいて、そのしくみを探ることを次段階の課題としたい。

引用文献

岡部　寛（1994）　「『こんな』類と『こういう』類」『現代日本語研究』第１号　大阪大学文学部日本学科現代日本語学講座　pp. 57-74

岡部　寛（1995）　「コンナ類とコウイウ類―ものの属性を表す指示詞―」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）』　くろしお出版　pp. 638-644

木村英樹（1983）　「『こんな』と『この』の文脈照応について」『日本語学』第２巻第11号　pp. 71-83

金水　敏・木村英樹・田窪行則（1989）　『指示詞』（寺村秀夫企画・編集　日本語文法セルフマスターシリーズ４）　くろしお出版

小学館辞典編集部編（1994）　『使い方の分かる類語例解辞典』　小学館

正保　勇（1981）　「『コソア』の体系」『日本語の指示詞』（日本語教育指導参考書８）　国立国語研究所　pp. 51-122

白川博之（監修）　庵　功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏宏（著）（2001）　『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』　スリーエーネットワーク

寺村秀夫（1984）　『日本語のシンタクスと意味』第II巻　くろしお出版

徳川宗賢・宮島達夫編（2001）　『類義語辞典』（33版）　東京堂出版

森田良行（1989）　『基礎日本語辞典』　角川書店

用例検索

CD-ROM版『新潮文庫の100冊』　新潮社

「青空文庫」　http://www.aozora.gr.jp

The Emotional or Evaluative Meaning of the Demonstrative Adjective "*sonna*" in "*sonna* N"

SUZUKI, Tomomi

The purpose of this paper is to investigate the emotional or evaluative meaning of the demonstrative adjective "*sonna*" in "*sonna* N" as in the following sentences.

(1) *Sonna* koto wa wakatte iru. (I know such a thing.)
(2) *Sonna* mono wa doo demo ii. (I do not care such a thing.)

These sentences show that the speaker sees the situation as worthless or meaningless. The perception of strength of the underlying emotional or evaluative meaning in these sentences is attributed to the use of *sonna* as in *sonna* koto or *sonna* mono.

This is different from the sentences using the demonstrative expression *soo iu* as the following.

(3) *Soo iu* koto wa wakatte iru. (I know the thing like that.)
(4) *Soo iu* mono wa doo demo ii. (I do not care the thing like that.)

Sentences (3) and (4) do not create the strong emotional or evaluative meanings as in seen in (1) or (2) above.

The result of the investigation shows that this "*sonna*" in "*sonna* N" is used when the speaker regards the situation as subjectively "negative", as in meaningless, worthless, unexpected, unsuitable or unrealistic. This is true even when the noun it modifies carries an objectively positive meaning, as in sentences (5) and (6).

(5) *Sonna* shinsetsu wa kaette meiwaku da.
(Such kindness is rather annoying for me.)

(6) *Sonna* rippa na shoo wa watashi ni wa mottainai.
(Such a wonderful prize is too good for me.)